

# 平成 28 年度 入学試験問題

## 国 語

### (第 1 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

科学とは、なにはともあれ、ある前提、あるいは法則の上に <sup>a</sup>キズかかっている。たとえば論理である。論理が通らなければ、科学にはならない。論理が通らないという議論が科学になるためには、それは、少なくとも論理が通らないということを、論理的に証明するものである必要がある。そうした論理を基礎<sup>きそ</sup>づけているのは、どういう学問か。それは数学であろう。当然のことだが、数学は実験室で証明することはできない。「頭のなかで」証明するだけである。本当は頭のなかだけではなく、紙と鉛筆<sup>えんぴつ</sup>がいる。この注釈<sup>ちゅうしゃく</sup>はほとんど冗談<sup>じょうたん</sup>に聞こえるかもしれないが、あとであなたが重要なことだとわかるであろう。それはともかく、数学とはなにか。これが典型的な脳の機能であることを疑う人はあるまい。それに似たものとして、論理学や哲学<sup>ていがく</sup>がある。これらが数学と違う<sup>ちが</sup>ところは、記号よりも言語を重視することである。それにしても、こうした数学、論理学、哲学などは、なにをしているのかというなら、脳の法則性を脳が調べているということであろう。その意味ではこれらは、典型的な脳の科学、神経系の科学なのである。

そういう科学は、脳のなかでは成り立つ。 <sup>b</sup>ゲンミツに言えば「意識のなかでは」成り立つのである。もちろんむずかしい数学になると、ほとんどの人の脳のなかでは成り立たない。というより、成り立つのか、成り立たないのか、それすらわからないのである。だから数学が脳のはたらきだとは、ふつうの人はあまり思えないのであろう。あんなむずかしいもの、 <sup>①</sup>俺<sup>おれ</sup>の脳のはたらきであるはずがないじゃないか。それは直観としては正しそうに思えるが、やはり間違っている。われわれはそれが成り立っていることを自分で証明できるのに、意識がそれを理解できないということとは、しじゅう経験するからである。

たとえばネコを屋根から放り出す。そうすると、ちゃんと四本の足で着地する。あるいはあなたに灰皿を持たせて、目の高さまで上げて、止めておきなさいという。そんなことは、だれでも簡単に実行できる。これはどういうことか。こうした動作はすべて、古典力学的な動作である。ネコの例は古典力学では「自由落下」の問題だし、灰皿の例は「釣り合いの条件を満たす」という問題である。古典力学はともむずかしくて、東京大学の理科系の入試問題は、何十年もその範囲<sup>はんい</sup>だけから出題される。それでも毎年、ちゃんと学生を選別できる。そういうむずかしい学問を知らなくたって、ネコの脳も、あなたの脳も、古典力学をきちんと「理解」して行動しているのである。それなら古典力学がネコやあなたの脳のなかに、「なにかの形で」入っていることは間違いないはずである。ただそれが古典力学という形で、「意識的に」取り出せないだけのことなのである。それを意識的に取り出せる人が、物理学者や数学者になる。

それでは数学はすべて「正しい」か。数学としては正しい。たとえばリーマン幾何学<sup>きかがく</sup>という変な幾何学がある。これはこれでちゃんとした幾何学である。そこではある直線外の一点を通って、

その直線に平行な直線は無数にあるという。もちろんユークリッド幾何学では、それは一本しかないという。あなたがJRに勤務しているとすると、新しい路線を作るのでレールをひかなければならないが、レールの一方をひいておいて、もう一本については、そのひき方は無限にあるはずだと主張するであろうか。もちろんしらないと思う。リーマン幾何学に即したと称して、どうしてもそれを主張するなら、クビになるか、すくなくとも病院に入る覚悟があるであろう。

脳のなかで成り立つ規則が、外の世界でも成り立つか。それを吟味することが、じつは物理学や化学でいう「実証」なのである。数学はたしかに頭のなかでは成り立つ。しかしそれが外の世界でどこまで成り立つか、それは確かめてみなければわからない。だからこそ物理学や化学が成り立つのである。そしてこうした学問は、徹底的に実証を重視するのである。つまり実証とは、脳のなかの規則と、外の世界の規則とを、対応させる行為なのである。その対応がつけば、われわれは安心して飛行機を飛ばすことができる。もちろん飛行機はちゃんと飛ぶ。ただし頭のなかでまったく考えないで、飛びたいからといって飛行機を勝手に設計すれば、それはまず間違いなく墜落する。こうして科学の世界では、脳のなかの法則性と、外の世界の法則性を対応させる作業が、ながらく続いた。もちろんいまでもそれは続いている。多くの人は「それだけが」科学だと思いきんでしまうほどに、それは有効に続いたのである。

では哲学とはなんだろうか。哲学はことばを使う。数学と哲学のいちばん違うところはそこである。ことばを抜いてしまうと、哲学は成り立たない。つまりことばを使った脳と世界の法則性の探求、これが哲学なのである。このうち「世界の探求」のほうは、しだいに実証科学に置き換えられていった。だから哲学から自然科学が発生するのである。残った哲学はことばを使って、ああでもない、こうでもないという。そのああでもない、こうでもないが、脳のはたらきにもつばら言及していることは、哲学者を見ればわかる。どの実験室でも、どの工場でも、どの農園でも、哲学者が働いているのを見ることがまずないからである。身体をほとんど使っていないように見える以上、なにもしていないか、頭を使っているか、どちらかに決まっている。しかし哲学者がときどき本を書くところを見ると、頭を使っているに違いないという結論が出る。

数学、論理学、哲学などが、脳の科学だというのはわかった。物理学や化学は、それを「実証する」ものである。では、それ以外の学問はどうか。たとえば心理学は、押しも押されもしない、脳の科学そのものである。文学はどうか。じつは文学もまた、脳の科学である。むちゃくちゃやいうな。だってあれは、感情とか情緒とか、要するに主観的なものを扱うものでしょうが。感情や情緒は、Aな脳のはたらきです。「主観」もまた、脳のはたらき。それでなけりゃ、なんのはたらきだというのだ。じゃあ、社会科学は。これらも脳の科学である。社会は脳が作るからである。

多くの動物が、それなりの社会を作る。アリはアリの社会を作り、チンパンジーはチンパンジーの社会を作る。そこで通用する法則は、アリの脳の法則であり、チンパンジーの脳の法則であるはずである。アリの社会は、遺伝子が作っているんじゃないの。そうともいえるが、直接にはア

リの脳が作っている。なぜなら、巢に出入りしている、あの小さなアリを一匹捕まえてきて、小さくてむずかしいけれども、脳を出して手術する。このアリを巢に戻したら、アリが精神病院を持っていれば、この手術されたアリは、そこに入れられるに違いないからである。それよりなにより、巢に戻れないか、戻れてもただちに追い出されるであろう。

アリを代表とする昆虫では、よく知られているように、行動が遺伝的に固定している。これを昔は本能と呼んだ。それでもアリの行動を直接に支配しているのは、遺伝子ではない。脳である。ただ昆虫の場合には、遺伝子が変われば、脳が変化し、ゆえに行動が変化する。その間にあまり可塑性がない。融通がきかないのである。だから昆虫の行動を脳が支配すると考えようが、遺伝子が支配すると見なそうが、それほどズレが生じないのである。

こうして社会の規則は脳の規則だと考えるなら、社会科学とわれわれが呼ぶものもまた、なんのことはない、脳の科学だとわかる。歴史学はどうか。歴史は社会の成り立ちと経過を考えるもので、それなら脳の法則を調べるものであろう。そのうえ、われわれの一生はただかだか百年しかない。その一生のうちに、千年、二千年という社会の歴史を、まとめて語ることができるという歴史学者こそ、脳のはたらきを探求してるとしか、いいようがないではないか。歴史学者個人の一生に比較したら、十倍以上の時間にわたる、数千万倍の人数の人たちのジセキを、まとめて語ろうなどというのは、脳でなくては考えないことである。そもそもそんなことができると思ふのが、脳の悪い癖なのである。それが証拠に、ただいま現在、われわれが生きている社会すら、歴史学者はどうなっているか、説明してくれないではないか。

整理してみよう。これまで科学といわれてきたリョウイキは、まず脳の法則性そのものを探求する数学、論理学、哲学などに分かれる。つづいてそれが外界の現象とどう対応するかを探求する実証科学、物理学や化学に分かれる。さらに生物学になると、そうした実証科学として、遺伝子系の科学が生じる。それに対して、心理学、文学、教育学など、人文科学に属する分野では、主として個人の脳のはたらきを調べているのだが、もちろん調べている人に、そういうつもりはほとんどない。さらに社会科学は、脳の法則性によって成立する社会現象を調べる。こうして脳すなわち神経系という情報系の科学とは、じつはほとんどがこれまで脳の科学とは思われていなかった、人文科学や社会科学というリョウイキの話だということがわかる。コンピュータの発達によって、これらの分野もコンピュータを多用するようになってきた。コンピュータとはなにか。これは脳のはたらきを、外部にBに延長したものである。コンピュータがたいへん有効だということを考えても、人文・社会科学という分野は、脳のはたらきを中心の対象とする分野だとわかるのである。

(養老子孟司『考えるヒト』より)

問1 ——線 a ~ d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ——線①「俺の脳のはたらきであるはずがないじゃないか」とありますが、このように思うことと関連が深いものはどれですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 世の中の多くの人たちは学問や学問的研究を難しいものと考えているため、敬遠しがちだということ。

2 我々は動作や行動としてできることであっても、それを筋道だてて説明できるとは限らないということ。

3 学問や発明というものは先人や学者が生み出したもので、自分の能力が及ぶものではないということ。

4 日常生活ではあれこれ考えて行動するよりも、無意識のうちに体が動いてしまう場合が多いということ。

問3 ——線②「『実証』」について、実証なしではできないこと具体例を述べている部分があります。その部分を文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問4 ——線③「『それだけが』科学だと思いきや」とありますが、なぜだと考えられますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 歴史的にみて、頭の中の法則と外界の規則とを結びつけることが科学の真のあり方を示すことであり、科学の価値を高めることにつながると人々は考えているから。

2 頭の中にある科学は、その正しさが証明されていないため真の科学とは言えず、その法則を理解することで、はじめて科学としての正当性を得られると言えるから。

3 頭の中の法則と外の世界の法則とを対応させると、さまざまなものが生み出されることにもなり、その結果科学は現実の世界に深くかかわるものと見なされるから。

4 人文・社会科学という分野は、脳と外界を対応させる実証が限界に直面する中で出現したものであり、それは科学を発展させるといふことは矛盾するものだから。

問5 ——線④「融通がきかない」とありますが、ここではどういふことですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 昆虫の場合、脳の変化と遺伝子の変化とは切り離せない関係にあるので、遺伝子が行動を支配していると考えても矛盾しないということ。
- 2 昆虫の行動は遺伝子によって支配されているので、むかしと現在の行動を比較しても両者の間に違いはまったく見られないということ。
- 3 生物の行動は脳のはたらきによって制御せいぎされているので、人間の高度で複雑な行動に比べると昆虫の行動は単純で画一的であるということ。
- 4 脳の変化と遺伝子の変化とはまったく別次元のものであり、これらを同列に扱うことはまったく意味がない考え方であるということ。

問6 空らん A・B にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- |   |       |       |       |       |
|---|-------|-------|-------|-------|
| A | 1 典型的 | 2 心理的 | 3 論理的 | 4 人間的 |
| B | 1 客観的 | 2 能動的 | 3 普遍的 | 4 意識的 |

問7 筆者は、なぜ歴史学を脳の科学と考えているのですか。その理由を説明した次の文の空らん 1 ～ 3 にあてはまることばを、文中からそれぞれ四字でぬき出して答えなさい。

歴史学とは、社会の 1 や移り変わりを考える学問である。その点で脳の法則によって生み出される社会現象を考える 2 と同様の学問である。また、膨大な時間を短時間でまとめ語ろうという点でも脳の 3 を模索しているということになる。これらのことから、歴史学は脳の科学と考えることができる。

(問題は次のページに続く)

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の比呂は、中学生になってからも好きな陸上をやらす、部活にも入らず、家と学校を往復する生活を続けていた。そんな折、陸上部顧問のハバちゃん(幅岸先生)が、比呂を陸上部に勧誘したがっていることを担任の伊沢先生から聞かされる。その日の昼休みには、陸上部員の達矢からも一度練習を見に来てほしいと声をかけられていた。

渡り廊下をグラウンドに向かって歩いていくときだった。

「藤堂さん、あたしたちとリレー組むのいやなんだって」

まがりくねった廊下のかたすみから、ヒステリックな声がもれてきて、比呂は A 足を止めた。

トレーニング姿のふたりの女生徒は、下校とちゅうに何度かグラウンドで見かけた二年生の陸上部員たちのようだ。

とりかこまれた少女の声が、ぼそりともれてくる。

「内申書かせぎにだらだら練習している人と組んだって、予選落ちが決まってるじゃないですか」

「あたしたちが内申書のために部活してるとでも言いたいわけ？」

「ちがうんですか」

「もちろん、ちがうわよ」

ふたりの肩ごしに、少女の顔がのぞいて見えた。 あの子だ。小鹿のようなしなやかな脚力で、

比呂の目の前を疾走していったきのうの少女じゃないか。

少女は足元に目を落として、うんざりしたように ① 肩をすくめている。

「あんたみたいに自分勝手な部員がいるから、チームのまとまりが悪くなるのよ。もっとチームのこと考えたらどうなの」

「陸上って個人競技じゃないんですかあ。チームチームって言う人ほど自分に甘いんだわ。あ、

そうか。先輩たちのタイムがあがらないのは、きっとそのせい……」

バシッ！ 手かげんのないたたき方だった。

少女はなぐられたほほをゆっくりなでながら、上目づかいにふたりを見る。 ② ぞっとするほど

冷たい目だった。

「何やってるんだよ」

グラウンドにつづく廊下を大股でやってきたのは、あの達矢という少年だった。

「つるしあげかよ。ハバちゃんに言いつけるぞ」

「そんなんじゃないわよ」

「いいからグラウンドに出ろよ。 ※ 千秋がカリカリしてたぞ」

ふたりが ③ 身をひるがえして、グラウンドのほうに走り去っていくのを見とどけてから、達矢



は少女につめよった。

「藤堂もいいかげん。あいつらを挑発するな」

べつにと言いながら、少女のほほがちよつとゆがむ。ふてぶてしいといってもいいような笑顔だった。

比呂のそばを横切ろうとするとき、ちらと視線を向けてきた。

小麦色に焼けた肌。白い部分がいくらか青みがかって見える大きな目。その目が挑むように比呂を見る。

思わず二、三步あとずさりすると、

「おう、来てくれたんだ」

気づいた達矢が、いそいでかけよってきた。

「まずいとこ見せちまったかな」

「……」

「でも、あれくらいはいざござはどこにでもあるさ。ふだんはみんな仲良くやってる。安心していいよ」

それはうそだと比呂は直感する。藤堂と呼ばれたあの少女が、みんなと仲良く肩を組んでいる姿なんて、だれが想像できるものか。

「藤堂は何を言われようと、ただがむしゃらに走るだけだよ。リクツはいいんだ。走るのが好きなやつは目を見ればわかるから」

比呂はあわてて目をふせた。

でも達矢は、べつに比呂の目の中をのぞきこもうとしていたわけではなかった。

「聞いた話だけど、きみのお兄さんって、わが校の伝説のヒーローなんだってね」

ぎくりとした。こんなところまで兄のうわさが追いかけてくるなんて。

「まさかハバちゃんが目をつけた生徒が、ヒーローの妹だなんてさ、グーゼンというか、キセキというか……」

顔があげられない。

「でも誤解しないでくれよ。きみがヒーローの妹じゃなくても、いつかゼツタイ陸上部にさそおうと思っただんだ」

「……」

「きみ、よくおれらの練習見てただろ。帰りがけに、ほら、グラウンドのすみっこのところで」

「……」

「走るのがきらいなやつって、陸上の練習見ただけで、なんであんなバカなことしてるんだって顔するんだよな。でもきみはそうじゃなかった。すごく熱い目でおれら見た。わかるんだよ。走るのが好きなやつのは」

⑤ ほほが強くひきつる。のどの奥に何かがつまる。気持ちが激しくいらだっていた。

——わたしが走るのが好き、ですって？ どうしてそんなことがあなたにわかるのよ。そんなにかんたんに他人のことがわかるなんて言わないで！

「話はそれだけですか」

「あ、まあ。そんなところだけど」

達矢は、急にとげとげした比呂のようすに、とまどっているようだった。

「わたし、陸上部に入る気ありません。走るのなんて好きじゃないですから」

吐き捨てるように言って背を向けた。涙が出そうになっていた。B 奥歯をかんだ。ばかみたい。泣くほどのことじゃないのに。わたし、どうかしてる。

引き返す廊下のとちゅうで、伊沢先生とすれちがった。

四時だとか、図書室だとか、そんな声が聞こえたけれど、比呂は足を止めなかった。

昇降口を出て、通りまでがむしゃらに歩いた。

とちゅうから小走りになった。交差点の赤いシグナルを無視して車道にとびだすと、

プップー！

耳をつんざくようなクラクションの音。

「赤信号だぞ。あぶないじゃないか！」

それでも比呂は、しゃにむに車道をつつきる。

立ち止まると、こらえていた気持ちがそこで切れてしまうような気がした。

つぎの通りを左にまがれば家はすぐだ。でも比呂は右に進路をとる。

左にまがると、卓が事故にあった十字路に行きついてしまう。

あの事故からとうに一年がすぎた。

ただ今も、比呂はまだあの場所に立つことができないでいる。

おにいちゃんの足をあんなふうにしたのはわたしだから。

ランナーとしての輝かしい未来をだいなしにしたのは、妹のわたしだから。

(中略)

その夜のことだった。

風呂あがりのぬれた髪を、バスタオルでごしごしやっていると、いきなりかあさんのかなきり声が耳にとびこんできた。

「あんた、今どこなの？ まさか成田なんていうんじゃないでしょうね。※クレモナ？ でも声すごく近くに聞こえるよ」

卓から電話のようだ。

「荷物？ まだ届いてないわよ。比呂にかわるの？ 用件はやくすませてね。電話代高いんだから。はいはい、今呼ぶから待ってて。比呂、ちょっと比呂ってば！」

ほとんど悲鳴といってもいい声で呼ばれ、比呂はぬれた髪のまま脱衣場をとびだし、受話器に突進する。

「もしもし、おにいちゃん」

「よお、比呂か」

その声は、時差が八時間もあるイタリアからとは思えないくらいはっきり聞こえた。

「話はきっかり三分にしてよ」

うしろから、かあさんの声がせかす。

その声が伝わったみたいに、卓も早口で言う。

「たぶんだいじょうぶだと思うけど、もしサイズがあわないようでも、送り返さなくていいからな。おなじメーカーの店が日本にもけっこうあるらしいんだよ。そこに持ちこむと、タダで代えてくれるってことだからさ」

「話、見えないよ。何送ってくれたの」

「はがき、読んだら」

「小包送ったとしか書いてなかったけど」

あれ、そうだつくと卓は明るい声で笑った。

「シューズだよ。ランニングシューズ」

一瞬、声がつまった。

「秋には総体があるし、がんばって走ってるごほうびつてことで。ま、期待させるほどのもんじゃないけどな」

「……わたし」

「気のぬけた声出すなよ」

「だって……」

走ってないから、と比呂は消え入りそうな声で言った。

「なんだ、陸上部に入らなかったのか」

「うん」

「どうして」

——どうしてだって？ なんて鈍感どんかんなのよ！ だから体育会系はきらいなんだ。

「おにいちゃんの足、そんなふうにしたの、わたしなんだもの。走れなくしたの、わたしなんだから……」

このひとことがずつとのどの奥に引っかかっていた。こわくて口にすることができなかった。

「だから走れるわけじゃない！」

たたきつけるように吐きだしてしまうと、それが限界だった。

おえっ、おえっ。小さな子どもみたいに嗚咽おえつがこぼれてくる。みつともないと思ったけど、こ

らえようがなくなっていた。

背中の方こうに、かあさんの気配があった。でも何も言わなかった。

「変わらないな、比呂は」

受話器の向こうから、のんびりした声がひびいてくる。

「ひとつつまずくと、いつまでもぐじぐじなや悩みつづける。とうさんにそっくりだぞ」

「そんな言い方しなくなつて」

また比呂は、C すすりあげた。

「たのむから、マジで悩まないでくれよ。それこそプレッシャーだよ。まいったな」

「……」

「事故のことは、そりゃ少しはショックだったよ。でもまわりが思うほど落ちこんじゃいなかった。自分でも意外なくらいさばさばしてた」

「うそ」

そんなはずはない。あの事故は、おにいちゃんにとって、人生最初の、そして最大のピンチだったはずだ。

——それも妹のわたしのせいでも……。

「おまえにうそをついてどうするんだよ。いいから、ちゃんと聞けよ」

「……うん」

ぬれた髪の毛のしずくが、D 首筋を伝っていく。その冷たさが張りつめた気持ちを刺激する。

「もちろん走るのはきらいじゃないさ。でもガキのころみたいに、ただ走っていれば楽しいかというところじゃなくなっていた。走ることで認められる。自分の価値があがる。そういうことのほうに夢中だった。走ることがいつか重荷になりそうな予感がしたのかもしれない」

⑥ まるで肩越しかたじに話しかけられているみたいに、その声は近くに聞こえた。

「あのまま大学に進んで、名前入りのゼッケンつけて、義務で走って、ボロボロにこわれていく自分を見なくてよかつたと、今はマジで思ってる」

卓はとつとつとしゃべっていた。比呂に聞かせるというより、自分の気持ちを、ここでもう一度確認かくにんしているのかもしれない。

「すげえ長話になった。これで切るぞ」

「あ。待って」

「なんだよ」

「おにいちゃん、そのシューズ、日本でも買えるって知らなかったの？」

「まあな」

「マヌケー」

「言うな、それを」

ぶつんと電話が切れた。

おにいちゃん、変わんないな。体育会系は鈍感だけど、テレ屋さんもけっこう多いんだ。これで気持ちがすっかり晴れたかというところ、やっぱりそんなことはなかった。

でも比呂は、兄の今の言葉をまるごと信じようと思っていた。 a たとえ b そこに、 c ほんのす

こしのうそと、いたわりの気持ち<sup>d</sup>が まじっていたとしても<sup>e</sup>。

こほん。うしろでかあさんの咳<sup>せき</sup>ばらいがした。

ふりむくと、手に宅配の荷物をもっている。

「さっき届いたの。イタリアからだって」

「やだーっ、どうして言ってくれなかったのよ。おにいちゃん、それで電話してきたのに」

「よけいな口はさんじやいけない霧<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>気<sup>き</sup>だったからやめたのよ」

比呂は部屋にかけこんで、いそいで荷をほどいた。幾<sup>いく</sup>重<sup>え</sup>にもかさなった包装紙の最後の一枚をはぎとるとき、おさえようもなく胸が高鳴った。

新品のシューズは、底まで白く輝いていた。なめした皮の上質なおいがした。

つま先でとんと床<sup>ゆか</sup>をならして、感<sup>かん</sup>触<sup>しよく</sup>をたしかめる。

うん、悪くない！

つぶやくと、<sup>⑦</sup>ふさいだ気持ちの底に穴があいて、にごった水が残らず流れだしていくような気がした。

(佐野久子『走る少女』より)

※あの子……この日の数日前に比呂はグラウンドで周囲に目もくれず練習<sup>はげ</sup>に励む藤堂さんを目にしている。

※千秋……陸上部のキャプテン。

※クレモナ……イタリアの都市。比呂の兄の卓はこの都市に留学している。

問1 — 線①「肩をすくめている」・③「身をひるがえして」・④「ふてぶてしい」のここでの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

①「肩をすくめている」

- 1 肩をちぢませ、やれやれという気持ちを表す。
- 2 肩をすぼめて、肩身がせまいという様子を表す。
- 3 肩を伸ばして、対等の地位で張り合う気持ちを表す。
- 4 肩を小さくして、責任から逃れたいという気持ちを表す。

③「身をひるがえして」

- 1 相手から逃げだすようにして
- 2 跳びはねるように向きをかえて
- 3 今までの態度を急にかえて
- 4 相手にぶつかるとして

④「ふてぶてしい」

- 1 反応をうかがっているさま
- 2 反省しきっているさま
- 3 開き直っているさま
- 4 悔しがつているさま

問2 — 線a「たとえ」が意味のうえでかかっている部分は線b～eのうち、どれですか。ふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

問3 空らん A D にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 ひやりと
- 2 ぎくつと
- 3 ぐすんと
- 4 ぐつと

問4 — 線②「ぞっとするほど冷たい目だった」とありますが、藤堂さんがこのような目つきをしていたのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自分たちのことは棚に上げて、手を抜いて練習していると責めてくる二人に対して怒りを感じているから。

2 競技に対して真剣に向き合っていないくせに、先輩ぶった態度をとる二人に対して嫌悪感を抱いているから。

3 勝てるはずがないと言っているのに、真剣に練習をつめば勝ると言い張る二人にうんざりしているから。

4 冷静な話し合いを求めているのに、感情的になってしまっている二人にあきらめの気持ちが出ているから。

問5 ——線⑤「ほぼが強くひきつる。のどの奥に何かがつまる。気持ちが激しくいらだつていた」とありますが、このときの比呂の気持ちの説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 兄の交通事故以来、走ることが好きだという気持ちを自分の中にしまいこんでいたが、事情を何も知らない達矢に走ることが好きだと指摘しってされたことで、腹立たしさや悔しさを感じている。

2 兄の交通事故以来、走ることが好きだという気持ちを自分の中にしまいこみ、他のことで楽しみを見つけようとしているのに、そのことを強く否定してくる達矢の無神経さにあきれている。

3 兄の交通事故以来、兄の話をされるたびに事故のことを思い出してしまうので、その話題をずっとさけていたが、達矢に急に話題をふられたため、どう反応していいかわからなんでいる。

4 兄の交通事故以来、兄の話をすること自体を敬遠してきたが、嬉うれしそうに兄の話をすると達矢を目の前にして、先輩だからと遠慮えんりよしてやめてほしいと言えない自分のことを悔しく思っている。

問6 ——線⑥「まるで肩越しに話しかけられているみたい、その声は近くに聞こえた」とありますが、このように比呂が感じているのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 兄がすらすらと話す言葉は、母の目を気にしたものだだったが、その態度の裏きょうだいに兄妹で隠かくし事を共有しようとする意図が見え、久しぶりの兄との会話をおもしろく感じているから。

2 兄がのんびりと話す言葉は、比呂を励ますためのうそであることがあきらかなものであったが、それをうそだと思わないことで、兄のことをもう一度信じようとしているから。

3 兄がつかえながら話す言葉は、不器用だが温かく比呂が今までずっと背負ってきたプレッシャーを少しずつとかしていくものであり、兄への遠慮がだんだんなくなっていたから。

4 兄がゆつくりと話す言葉は、比呂の気持ちを考えない一方的な内容ではあったが、その態度は兄特有のテレ隠しであると考えるとほほえましく、兄を好意的に見ているから。

問7

線⑦「ふさいだ気持ちの底に穴があいて、にごった水が残らず流れだしていくような気がした」とありますが、このときの比呂の気持ちの説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 比呂は、事故で足を怪我した兄が陸上をやめたことを、すべて自分の責任だと思いこんでいたが、兄からシューズを贈られたことで、すべてが許されたことを知り、もう一度走ろうという気持ちになった。

2 比呂は、兄が事故で足を怪我したのは自分のせいであると周囲から言われ続けて疲れきっていたが、兄から自分の責任ではないと言われたことで安心し、兄のシューズでもう一度走ろうという気持ちになった。

3 比呂は、兄の選手としての夢をうばった自分には陸上部に入って走る資格はないと思いつこんでいたが、兄の気持ちを確認したことで気持ちの整理がつき、兄からももらったシューズでもう一度走ろうという気持ちになった。

4 比呂は、兄が夢をあきらめたことに責任を感じていたが、その考えが兄にずっとプレッシャーをかけ続けていたことを知り、兄の期待に応えるためにも、兄から贈られたシューズでもう一度走ろうという気持ちになった。



(問題は次のページに続く)

3 次のA・Bの詩を読んで、後の問いに答えなさい。

A

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ

父よ

僕を一人立ちにさせた広大な父よ

僕から目を離さないで守ることをせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため

この遠い道程のため

(高村光太郎「道程」)

B

きつぱりと冬が来た

八つ手の白い花も消え

公孫樹の木も箒になつた

きりきりともみ込むような冬が来た

人にいやがられる冬

草木に背かれ、虫類に逃げられる冬が来た

冬よ

僕に来い、僕に来い

僕は冬の力、冬は僕の餌食だ

しみ透れ、つきぬけ

火事を出せ、雪で埋めろ

刃物のような冬が来た

(高村光太郎「冬が来た」)

問1 次のア～オの表現技法について、A・Bの詩での用い方を説明したものととして最もふさわしいものを後の1～4から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア 直喩ちよくゆ    イ 擬態語ぎたいご    ウ 反復法    エ 呼びかけ    オ 擬声語

- 1 Aの詩だけに用いられている。
- 2 Bの詩だけに用いられている。
- 3 A・Bどちらの詩にも用いられている。
- 4 A・Bどちらの詩にも用いられていない。

問2 AとBの詩について説明した次の文の空らん ア ウ ウ に入ることばを、それぞれの詩の中から二字以内でぬき出して答えなさい。

【A】

「道程」とは自分自身で切り開いていく人生のことであり、それを支えてくれる ア を イ にたとえている。

【B】

人にも自然にもいやがられる「冬」ではあるが、「僕」はそれを自分の ウ の源として生きていこうとしている。

4 次のア～オが表す部首と後の1～10とを組み合わせさせて漢字をつくります。一つの部首に対して二つの漢字ができます。それぞれ二つずつ選び、番号で答えなさい。ただし、できあがったものは、すべて小学校で習うものであり、同じものを二度以上使うことはできないものとします。

例 小さな鳥の形をかたどった部首 答え 99

(部首は「隹」で、「木」を組み合わせさせて「集」になる。)

ア 筋肉をもりあげたうでの形を表す部首

イ 「いね」の実った形を表す部首

ウ お金や宝、交易（かか）に関わることを表す部首

エ 心臓の形をかたどった部首

オ 着物のえりもとの形を表す部首

1	生
2	才
3	免
4	交
5	制
6	里
7	火
8	化
9	必
10	非

⑨ 99 木